

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月29日現在

機関番号：20101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21592809

研究課題名（和文） 妊産婦ケアにおける助産師の経験知獲得フェーズモデルの構築

研究課題名（英文）

Phase model for the acquisition of practice-based knowledge by midwives from experience in labor and delivery care

研究代表者

正岡 経子（MASAOKA KEIKO）

札幌医科大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：30326615

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、妊産婦ケアにおける助産師の経験知獲得フェーズモデルを明らかにすることである。病院および助産院に勤務する助産師を対象にインタビューおよび質問紙調査を行った。助産師475名を分析した結果、経験10年以上の助産師は、妊娠期から産後の継続ケアの経験や腹部触診で児の推定体重を推測する経験、会陰保護を実施しない分娩介助経験から正常と異常を見極めや産婦の心理面を乱さないケア能力獲得していることがわかった。一方、経験10年未満の助産師は、自己のケアの振り返りや先輩助産師のケアを見る経験から出産の自然経過を妨げないケアや出産で関わった女性とのコミュニケーションの重要性を学んでいることがわかった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to articulate the phase model for the acquisition of practice-based knowledge by midwives from their experience in labor and delivery care. Data were collected from midwives working at hospital or maternity home through interview and questionnaire survey. Data from selected 475 respondents were statistically analyzed to examine if there was relationship between the number of years in midwifery and the types of practice-based knowledge acquired. Knowledge and skills acquired significantly more by those with at least ten years of experience related to how to determine if the labor progress was normal or not and how to respect the pregnant woman's emotions and keep her emotionally stable. They acquired these knowledge and skills from the experience of assessing the fetal weight by palpation and assisting delivery without perineal protection. Those under ten years of experience had significantly higher scores in learning the importance of ensuring that the delivery should take its natural course and of maintaining good communication with the pregnant woman. They acquired this knowledge from the experience of witnessing the work of senior midwives and having a habit of reflecting own performance.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	437,034	131,111	568,145
2012年度	762,966	228,889	991,855
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：助産師・妊産婦ケア・経験知

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景

産婦人科医の不足と偏在により分娩可能な施設が急減する社会現象が生じていることから、助産師にはその専門的立場から正常妊娠出産における適切な判断力とケア能力が一層求められている。経験豊富な熟達助産師の卓越したケアに関する研究報告はあるが、経験年数を積みば誰もが熟達者になるとは限らず、経験の質が重要である。しかし、具体的にどのような経験が卓越したケア能力の獲得につながるのかは明らかにされていない。経験豊富な助産師が、過去のどのような経験から知識および技術を学んでいるのかを明らかにすることは、これから経験を積む助産師が意図的に経験から学ぶことが可能になると考える。

(2) 本研究に関連する研究者らの研究成果

本研究に取り組むにあたり、研究者らは助産師 768 名を対象に産婦ケアにおいて助産師が着目している情報を明らかにする目的で質問紙調査を実施した。質問紙は 437 名 8 回収率 56.9%) から回収された。分析の結果、助産師経験 10 年未満と 10 年以上では、産婦ケアを行う上で着目する情報に違いがあることが明らかになった。本調査より、経験 10 年以上の助産師は、産婦と家族の心理面を洞察し多様なニーズに対処する能力を有していることが示唆された。しかし、これらの能力をどのような経験を通して獲得しているのかは明らかにできなかった。

そこで、経験 10 年以上の助産師 19 名を対象にナラティブ研究を行い、助産師が過去のどのような経験が経験知の獲得につながっているのかを調査した。その結果、その結果 5 つの経験知と 35 の経験が明らかになった。

2. 研究の目的

本研究では、これまでの研究者らの調査を更に発展させるものであり、以下の 4 つの目的で行う。

- (1) 経験 10 年以上の助産師の産婦ケアにおける経験(具体的なエピソード)と経験知を明らかにする。
- (2) 経験 10 年未満の助産師の産婦ケアにおける経験(具体的なエピソード)と知識および技術を明らかにする。
- (3) 上記(1)と(2)の結果を比較し、経験年数による助産師の経験知の特徴を明らかにする。
- (4) 産婦ケアにおける助産師の経験知獲得フェーズモデルを明らかにする。

3. 研究の方法

研究目的(1)~(3)については、質的研究デザイン：ナラティブリサーチとする。助産師

12 名を対象に 1~2 時間程度のエピソードインタビューを行う。分析は Kelly らのナラティブ分析の手法を用い、産婦ケアの経験と経験知を明らかにする。

研究目的(4)については、量的研究デザインとする。助産師 31 名へのインタビュー結果に基づき無記名自記式質問紙を作成した。質問紙は、対象者の属性(年齢や助産師経験年数、勤務先、教育背景など)の他、産婦ケアの経験についての質問 93 項目と経験知についての質問 87 項目(合計 180 項目)で構成されている。回答は、産婦ケアの経験については、「経験したことがある」と「経験したことがない」にわけ、「経験したことがある」については、鮮明に覚えている出来事がある、大体覚えている出来事がある、覚えている出来事がないという 3 段階にわけ回答を求めた。経験知に関しては「その通り」~「そうではない」の 4 段階尺度とし、わからないという選択肢を設けた。全国の助産師を対象に郵送法にてデータ収集を実施した。助産師の経験年数と獲得している経験知、および経験と経験知の関連を統計的に分析した。

倫理的配慮に関しては、インタビュー調査は、協力者に調査の主旨、協力の任意性、途中辞退の自由、匿名性の保証などを文書と口頭で説明し、同意書への署名をもって意思を確認した。質問紙調査に関しては、施設長へ研究協力の諾否の意思を確認した後、所属の助産師に質問紙を配布した。助産師に対しては研究の主旨、協力の任意性、データは記号化され統計処理されるため個人が特定されないことなどを文書で説明し、質問紙の回収をもって同意を得たものとした。これらの研究プロセス全てに関して、研究代表者が所属する施設の倫理委員会の承認を得てから実施した。

4. 研究成果

(1) 経験 10 年以上の助産師が獲得している経験知：協力者は 21 名で、平均年齢は 45 歳、平均経験年数は 19 年 9 ヶ月であった。分析の結果、5 つの経験知と経験知獲得の背景にある 35 の経験が明らかになった。1. **線で見極める分娩経過による医療のタイミングの見極め**は、母体搬送や緊急帝王切開などの経験から獲得していた。2. **産婦の産む力と自然回復力**は、妊娠期からの信頼関係などの経験から獲得していた。3. **産婦と家族のペースや気持ちに沿う満足な出産**は、妊娠期から産婦に寄り添うケアによって獲得していた。4. **出産はつなぎ目のない連続した生活のプロセスであり人生そのものは、産婦の言動や生活から感じる経験によって獲得していた**。5. **医師からの信頼の獲得と交渉術**は、医師との

闘いや理解によって獲得していた。

(2) 経験 10 年未満の助産師が獲得している知識・技術：協力者は助産師 10 名で、平均年齢 29.2 歳(24-35)、平均経験年数 4 年 8 ヶ月であった。分析の結果、8 つの知識・技術とそれらの獲得の背景にある 31 の経験が明らかになった。**1. 出産の怖さと助産師の判断・責任の重要性**は、異常経過の妊産褥婦のケアや先輩助産師のサポート等 4 つの経験から獲得していた。**2. 教科書通りにいかないケアの個別性**は、正常経過の妊産褥婦のケアやハイリスク妊婦のケア等 3 つの経験から獲得していた。**3. 緊急時の対応**は、異常経過の妊産婦との関わり等 2 つの経験から獲得していた。**4. 母と子どもの力のすごさ**は、入院中の妊婦と分娩まで継続して関わるケア等 4 つの経験から獲得していた。**5. 妊産婦の気持ちの理解とコミュニケーションのとり方**は、妊産婦の経過に時間をかけて関わるケア、先輩助産師のケアを見る経験等 5 つの経験から獲得していた。**6. 女性に寄り添う助産師の役割認識とケアの難しさ**は、学生時代の実習や対象者のその後の経過を知る等 5 つの経験から獲得していた。**7. 経過の判断と助産技術**は、異常経過のケースとの関わりやケアの後悔の経験等 5 つの経験から獲得していた。**8. 医師への報告と関わり方の工夫**は、周産期の一通りのケア経験とリーダー業務や医師との意見交換など 3 つの経験から獲得していた。上記 1~4 は 5 年未満の経験から獲得しており、5~8 は 1 年目から 10 年未満の経験から獲得していた。

(3) 経験年数と妊産婦ケア経験の比較

ここでは、上記(1)と(2)の分析結果を基に作成した無記名自記式質問紙による調査結果を記述する。

分析対象は、助産師 475 名で平均年齢 36.5 歳(22 歳-67 歳)、平均経験年数 21 年 9 ヶ月(1 ヶ月-43 年)であった。475 名の内訳は、経験 10 年未満が 249 名で、10 年以上が 226 名であった。

妊産婦ケアに関する 93 の質問項目について分析した結果、経験 10 年以上の助産師は 10 年未満の助産師に比べて、45 項目について鮮明に覚えている出来事があると答えている助産師が有意に多かった($p < 0.05$)。有意差のあった主な内容は、産科外来で妊婦健診を担当し妊婦の腹部触診により児の推定体重を推測した経験や、妊婦や産後の母子の家庭訪問を行うなど、継続的に関わり女性の生活を知る経験。更に、助産師が自分 1 人しかいない状況での分娩介助や母体搬送に付き添った経験など緊張や責任が重くのしか

かる中でのケア経験。また、定められた場所以外での分娩介助や会陰保護をしない分娩介助など、対象者のニーズに合わせた分娩介助の経験などであった。

一方、経験 10 年未満の助産師は 10 年以上の助産師に比べて 5 項目について鮮明に覚えていると答えている助産師が有意に多かった($p < 0.05$)。その内容は、自己のケアの振り返りをノートに記述した経験や先輩助産師の分娩経過の判断を聞いたり、ケアを直接側で見た経験であった。

(4) 経験年数と獲得した経験知の比較

妊産婦ケアにおける経験知 87 項目について助産師経験年数との関連を分析した。その結果、経験年数 10 年以上の助産師は、29 項目について経験知を獲得したと回答した助産師が有意に多かった($p < 0.05$)。有意産のあった主な内容は、「自然経過に沿って待てる分娩と待てない分娩の見極めができる」、「産婦の変化を観ることで内診せずに分娩進行を判断することができる」、「母子の急変時に先を予測した行動ができる」、「分娩に集中している産婦の気を散らさないケアができる」という分娩進行の正常・異常の判断と急変時の対処の他、「医師から信頼を得て連携を取ることが出来る」や「医師の特性に合わせた報告ができる」など医師との関わり方に関する経験知であった。

一方、経験 10 年未満の助産師は 10 年以上の助産師と比較して、3 項目について経験知を獲得したと答えた助産師が多かった($p < 0.05$)。その内容は、「胎児心音の低下がみられる分娩では内診しない方がよい」、「自分の出産を担当した助産師に対して女性は人生や本音を語るのも、語りの場を作ることが重要である」といった、分娩の自然経過を妨げない関わりや、出産で関わった女性とのコミュニケーションの重要性に関する経験知であった。その他、「ケアや知識の共有は、良い人間関係に基づいて行われる」というチームケアにおける人間関係の持ち方に関する経験知についてもその平均値が有意に高かった。

(5) 今後の課題

本研究により、助産師が妊産婦ケアの経験からどのような経験知を獲得しているのかわかった。今後は以下の 4 点について分析を継続する。

1. 助産師の経験年数を 5 年未満、5~10 年未満、10 年~20 年未満、20 年以上の 4 段階に分類しケア経験内容を段階別に明らかにすること。
2. 上記 4 群について獲得している経験知を

明らかにすること。

3. 妊産婦ケア経験と獲得している経験知の相関関係を分析すること。

さらに継続研究としては、熟達助産師が獲得している経験知についての科学的エビデンスを明らかにすると共に、経験学習の相違をもたらす背景についての探究が必要であると考え。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 正岡経子、丸山知子、松尾睦、林佳子、荻田珠江、女性の産む力を引き出す熟達助産師の経験知、札幌保健科学雑誌、査読有、第2号、2013、27-34
- ② 正岡経子、丸山知子、産婦ケアにおける助産師の『語り』から経験知を抽出するナラティブ分析の検討、日本保健医療行動科学学会年報、26巻、2011、158-168

〔学会発表〕(計6件)

- ① MASAOKA, K., HAYASHI, Y., MARUYAMA, T., Practice-based Knowledge Japanese Midwives Use in Assessing the Progress of Labor and their underlying experiences. Comparison of midwives with less than ten years of experiences and those with longer experience. The 2nd International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science. Cancun, Mexico, 2011
- ② 正岡経子、丸山知子、林佳子、吉田真奈美: 経験10年未満の助産師が妊産婦ケアの経験から獲得した知識・技術. 第25回日本助産学会学術集会. 名古屋. 2011
- ③ 正岡経子、丸山知子: 産婦ケアにおける病院助産師の経験知. 第24回日本助産学会学術集会. 茨城. 2010
- ④ 正岡経子、丸山知子: 開業助産師の産婦ケアから獲得する経験知 - 出産は女性の人生と生活 -. 第25回日本保健医療行動科学学会学術大会. 群馬. 2010
- ⑤ MASAOKA, K., MARUYAMA, T.: How Japanese Midwives Acquire and Use Practice-based Knowledge to Build a Good Working Relationship with Obstetricians. The 16th International Congress of the International Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology. Venetia, 2010
- ⑥ MASAOKA, K., MARUYAMA, T.: How Japanese Experienced Midwives Acquire and Use Their Practice-based Knowledge to Bring out the Woman's Innate Ability

to Give Birth. The 16th International Congress of the International Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology. Venetia, 2010

〔図書〕(計0件)

なし

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

なし

○取得状況(計0件)

なし

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

正岡 経子 (MASAOKA KEIKO)

札幌医科大学・保健医療学部・准教授

研究者番号: 30326615

(2) 研究分担者

丸山 知子 (MARUYAMA TOMOKO)

天使大学・看護栄養学部・教授

研究者番号: 80165951

(3) 研究分担者

松尾 睦 (MATSUO MAKOTO)

北海道大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号: 20268593

(4) 研究分担者

林 佳子 (HAYASHI YOSHIKO)

札幌医科大学・保健医療学部・講師

研究者番号: 50455630

(5) 研究分担者

吉田 真奈美 (YOSHIDA MANAMI)

前札幌医科大学・保健医療学部・助教

研究者番号: 90404756